

## 第3章 実践研究の方法と経過

この報告書に記す実践研究は、最初から確たる理念や方法論が確立していたわけではない。悩み、考え、実験し、試行錯誤を繰り返しながら、徐々に理念と具体的な方法を確立してきた。「人間」について考察し、子どもたちの様子を詳細に観察し、親たちや社会全体の心理状態について分析し、自分自身の歩み方を常に見直し軌道修正しつつ、38年をかけて探究してきた結果が、現在のトモエの生活教育環境なのである。そして、トモエは現在でも進化の途上にある。

この章では、現在に至るまでの実践研究の方法と経過を、簡単に記す。

### (1) いじめ問題を通して幼稚園の改革を始める

1969年、木村仁はキリスト教プロテスタントの牧師となり、北海道十勝の上士幌町で、教会付属の愛光幼稚園長に就任した。30才であった。

その幼稚園では、子どもが起立した時に椅子が少しでもカタと音がするとやり直しをさせるほど厳しかった。友達との私語も許されなかった。子どもたちは「きちんと、ちゃんと、しっかりと」三拍子そろっている。教師の指導で何でもこなしてしまう子どもの才能の凄さに感動していた。

しかし、ある日のこと、休み時間に教師の目の届かないトイレで、子どもたちは集団で弱い者を囲んで、つついたり叩いたり、いじめをしていたのである。

子どもたちは、教師から厳しく言われ、ほぼ完璧に聞き従わなければならない。大人の目が気になって、自己を素直に表現できないでいた。その緊張から心身に溜まり続けるストレスを、弱いものをいじめて発散させていたのだ。子どもたちは、教師に好かれたい、嫌われたくないと、懸命に教師の指示に従おうとしていたのだ。

すでに30年以上も前から、子どもたちにはいじめ問題が表面化していたのである。どうすればいいのか悩みに悩んだ末に、自分ができることから実践するしかない、と覚悟をきめることとなった。子どもの世界を学び、「教育とは何か」「人間とは何か」の原点に立ち戻っていった。

ここから、真の人間教育を目指した実践研究の歩みがスタートすることになったのである。

### (2) 園舎をオープンスペース化して、自然の中で自由な活動を楽しむ

まずは、子どもたちが喜びそうな遊びをことごとく実験してみた。オートバイに子どもたちを乗せて園庭を乗り回したり、太い木の上にツリーハウスを作ったり、10メートル四方の大きな網を張りめぐらして登ったり、直径1メートルの土管をいくつも重ねて家を作ったり。ターザンロープや、高さが2メートルもある平均台に登らせたりと、思いきり創意工夫しながら体を使えるような環境の中で生活をさせてみた。すると、子どもたちの目は見違えるほど輝き出してきた。エネルギーに体を使って遊んだ後の子どもは、とても満足した顔をしていた。

1974年には、園舎の中の壁を取り除き、オープンスペースにして、どの教室にも自由に行き来できるようにした。すると、友達関係の幅も広がり、遊びに活気が出てきた。4人の教師によるチームティーチングの実践も開始した。

自然の中にも連れていった。雑木林の木に登り、林の中にブランコを作る。草原では思いっきり走り、タンポポやクローバーの花で遊ぶ。川では魚をつかみ、笹舟を流す。山の奥深くに入って縦横無尽に遊び、ふわふわの腐食した土を掘り返して植林をした。

自然の中で親しい人との関わりがもてる生活ができるようになると、子どもたちは生き生きとした

目の輝きを見せ、本来の子どもらしい茶目っ気を出し、自分を素直に表現できるようになっていった。その素直な表現から、個々をより深く理解できることを知ったのである。

### (3) 親の教育の必要性を痛感する

しかし、問題点も明らかになってきた。子どもが天真爛漫に自分を表現するようになると、その変化を理解できずに悩み始める父母が増えてきたのだ。子ども本来の遊びの姿を理解することよりも、絵を描き、歌を唄い、合奏、読み書き計算などの授業を望む親も出てきた。親が園に対して不信感を持ち始めると、それまでぐんぐん伸びていた子どもの成長が、ピタリと止まったように感じたのである。

幼児がいかに親の影響を大きく受けて育っているかに気付かされることとなった。親が子どもの足を引っ張って、成長の邪魔をしているのである。子どもだけではなく、親子一体の家族教育が重要であることを強く感じた出来事であった。

子どもの世界を知り、我が子の成長を見極め、思春期以降も会話がいつまでも続く親子の絆を創るためには、親も子どもと一緒に楽しむ毎日を創るしかない。そこで、幼稚園を開放して、親も自由に参加できる場とした。

親の成長を促すために、年に3回の母親実習制度を設けた。母親たちは教師と同じように動いて、子どもたちの活動や自己の言動などを記録し、それぞれの体験について話し合ってもらった。

親たちは、様々な子どもと関わり、自分の子どもを客観的に見ることを学んだ。子どもの言動の表面的なところだけではなく、その背後に隠されている目には見えない子どもの心理を、次第に理解できるようになっていった。

こうして親が変化していくと、おのずと子どもたちも大きく変化していく。後に乳幼児精神医学を学んだ時に「母子相互作用」という概念に出会ったのであるが、まさに親と子が相互に成長し合う精神環境の創造は、この時から本格的に始まったといえる。

### (4) 米国社会共同体視察と愛光幼稚園閉園

1976年、牧師の研修で米国の社会共同体を研究する機会を得て、2カ月間、様々な社会共同体を視察することができた。大都市や農村地帯など、立地や目的によって共同体の形は違っていたが、どの共同体においても、大人も子どももワイワイガヤガヤと楽しそうに生活していた。人々がお互いに助け合い、補い合って、個々が生き生きとしていた。大人も子どもも時間と空間を共有し、互いに許し合える、おおらかな世界であった。かつて日本にも当たり前のように存在していた、人との親しい関わりが持てる地域社会が形成されていた。

アーミッシュという農業共同体では、住宅や畜舎の建設に部落民が皆集まり、のんびりゆったりと楽しみながら作業をしていた。畑ではトラクターを使わずに馬で土を起こし、土に優しくふれていた。人の健康のために農薬や化学肥料を使用しない、自然農法であった。

ここで印象的だったのは、多くの鳥たちが畑の土に群がっていたことであった。土中の虫をついばむために、鳥が集まっているのだった。当時から日本の畑はどこでも薬づけであったため、アーミッシュの畑のような光景は見ることはできなかったのである。

人と人との関わり合い、人と自然との関わり合いを、ここでも再確認させられたのであった。人間教育の原点は「群れて育つ」生活教育環境であることを確信したのである。

1978年には帯広市にて、教育写真展「オープンシステム教育実践」を開催した。それまでの実

実践研究の中で撮りためた写真と、人間学的考察から紡ぎ出した言葉とで、会場を構成した。この実践研究を社会に大きくアピールする、その第一歩となった。

しかしながら一方で、狭い教室内での教師指導型の従来の幼稚園教育を望む親は、この実践を理解できずに不信感を募らせていた。田舎の小さな町の幼稚園であるから、理解者の存在も直接は園児数増にはつながらなかった。

1979年、愛光幼稚園は閉園することになった。これは実践研究の断念ではなく、さらなるステップのための、ひとつの決断であった。

#### (5) 札幌に「ばんけい幼稚園」を創設する

愛光閉園後、国内留学のために上士幌を離れ、札幌に出て様々な学びをすることになった。中でも、北星学園大学の聴講生として「心理学」や「青少年犯罪学」を学んだことによって、家族教育の重要性を再確認することができた。さらに、市立盤溪小学校にて実習研究をする機会が得られたことは、以後の実践への確かな足がかりとなった。

1980年に、札幌市郊外の山の中、スキー場の隣接地に、まずは無認可の家族教育施設を開設した。これをもとにして、翌年の1981年、「ばんけい幼稚園」を設立した。森の中の雄大な自然環境の中で、親たちも自由に参加し、共に育ち合える生活教育環境の創造を本格的に実践し始めた。

自然と親しく関わり、人と親しく関わるために、好きな場所で好きな人と自発的に活動できるようにした。親たちも自由に参加して、子どもを理解し人間について学び合うことができるようにした。スタッフは、男性4名・女性3名のチームティーチングとした。

男性スタッフが多いことで、仕事に忙しく存在の薄い父親に代わって、ダイナミックな精神環境を創ることができた。男性スタッフの存在が多くの父親の子育て参加に影響を与えたことは、社会に大きな貢献をしたと思う。

人間を総合的に学び実践できるスタッフの養成の必要性を感じ、全国各地へ研修旅行を実施した。宮城まり子氏の「ねむの木学園」や福井達雨氏の「止揚学園」をはじめとして、全国各地の様々な施設を見学し、実習した。

ばんけいでの実践研究は、いくつかの形となって社会へ発信されることとなった。1984年には、一光社から『人が好きになる子育て - 札幌ばんけい幼稚園の自由な教育 -』が出版された。1985年には、491アヴァンから写真集『黒ひげ園長のいきいきファミリー教育』が出版された。同年には、民間教育放送協会によって『“いけません”からの解放』と題して30分番組が制作され、全国放送となった。

#### (6) ビニールハウスで再出発

ばんけいでの5年間によって、私たちの実践研究の方向性はますます明確になっていった。当時は入園希望者が定員を大きく上回り、抽選にせざるをえないほどの盛況であったが、さらに理想的な環境を求めて、私たちは歩みを発展させることとなった。1986年には教職員一同がばんけいを辞職して、新たな学園の設立へと動き出したのである。

求める場所は、札幌市南区にあった。自然のままの森があり、小川が流れ、民家もわずかで、静かな環境である。

しかし、困ったことに、この周辺は市街化調整区域であり、学校法人の認可がない限り、園舎を建設することができない。認可の申請はしていたが、春の開園には間に合わない。さて、どうするか。

苦肉の策として、法律上は建築物にはあたらないビニールハウス2棟を建て、これを園舎として利用したのであった。「トモエ幼稚園」のスタートである。

タタミを敷きつめて家具を置いたり、屋根全体に日除けをかけて暑さを凌いだりと、ビニールハウスの中であっても可能な限り快適に生活できるように、スタッフも親たちも皆で創意工夫し合って環境を創っていった。

園舎がビニールハウスだったことは、私たちの実践研究にとっては、むしろ大きな飛躍と成果の連続だったともいえよう。子どもたちも大人たちも、立派な建物の中で生活するよりも、かえって外の自然を身近に感じる事ができた。何もない不便な生活を通して、どのようにしたらより快適な毎日を創造することができるのかを、ひとりひとりが自ら考え実行することができた。狭い空間の中に大勢の人がいたために、お互いに親密な人間関係を形成することができた。

また、東京・銀座で8日間の教育実践写真展「人間性回復のための人間教育」を開催した他、各地で講演会などを開き、この実践研究の意義を世に訴え続けた。早く学校法人の認可を、早く新園舎建設をと、父母たちの意識も非常に高まっていた。この2年間の活動を通して、多くの人の協力を得ることができたことは、私たちの実践研究にとって大きなエネルギーとなったのである。

#### (7) トモエの設立、そして現在に至るまで

1988年、北海道私学審議会において、トモエは「自然体験型特認園」第一号として認可されることとなった。学校法人創造の森学園札幌トモエ幼稚園として、新たなスタートを切ったのである。

トモエでの実践研究は、それまでの歩みをさらに発展させたものとなり、それは現在でも継続し続けている。

自然環境を最大限に生かし、人間の豊かな感性を養うこと。オープンスペースの園舎によって、幅広い人間関係を持ち、多様な活動を展開すること。スタッフ全員によるチームティーチング制によって、個々人を総合的に捉え、きめ細かく関わり合うこと。親たちがいつでも自由に参加することによって、それぞれが主体的に感じたり考えたり行動したりできること。研修会や講演会を通して「人間」について総合的に探究し、ひとりひとりが確実に変化し成長していくこと。等々。

現在では、赤ちゃんからお年寄りまで様々な人々、百数十人が毎日トモエに集い、お互いに支え合い、補い合い、刺激し合って生活している。社会共同体的な生活教育環境が創造されつつあるといえるであろう。

この実践研究は、新聞・雑誌・書籍・ラジオ・テレビ番組など、数多くのメディアに取り上げられ、紹介されてきた。2005年には、民間教育放送協会によって『森の園長は子どもから学ぶ』というテーマで30分番組が製作され、全国放送された。

1999年には、父母有志の編集により、写真集『いいものみつけた』が出版された。また、2001年に木村仁著『創造の森の仲間たち - 札幌トモエ幼稚園のファミリー教育 - 』、2003年に『お母さんが輝く子育てのすすめ - 人間の素晴らしさを発見する教育 - 』の二冊の実践記録が樹心社から出版された。

トモエの実践研究の詳細は、以下の章で記述していくことにする。

< 参考資料 >

\* 木村仁 略歴

- 1938年 東京・雑司が谷にて生まれ、地域の多くの人々に支えられ育てられる。  
その後、宮城・横浜に転居、創意工夫して遊びの世界を広げる。
- 69年 北海道上士幌町のプロテスタント教会牧師に就任。  
教会付属・愛光幼稚園長に就任。
- 74年 4人体制のチームティーチングと園舎オープンスペース化。  
自然教育の実践。母親実習を制度化。
- 76年 米国の社会共同体と人間教育の研究視察。
- 78年 帯広市にて、教育写真展「オープンシステム教育実践」を開催。
- 79年 愛光幼稚園長を辞任。牧師国内留学。  
北星学園大学にて青少年犯罪学を学ぶ。札幌市立盤溪小学校にて実習研究。
- 80年 札幌市中央区盤溪スキー場内に、無認可幼児園創設。  
親が参加する教育実践。
- 81年 学校法人盤溪学園ばんけい幼稚園認可・創設。園長に就任。  
大自然教育とオープンスペースの園舎。  
7名の教諭によるチームティーチング。
- 84年 『人が好きになる子育て-札幌ばんけい幼稚園の自由な教育-』（一光社）出版。
- 85年 写真集『黒ひげ園長のいきいきファミリー教育』（491アヴァン）出版。
- 86年 ばんけい幼稚園長辞任。トモエ幼稚舎創設。舎長に就任。  
ビニールハウス2棟で、8名のスタッフによるチームティーチング。  
家族が自由に参加できる家族教育。健常児・障害児の区別を解消。
- 87年 教育実践写真展「人間性回復のための人間教育」を東京・銀座にて開催。
- 88年 学校法人創造の森学園札幌トモエ幼稚園認可・創設。理事長・園長に就任。  
オープンスペース園舎新設。10名のスタッフによるチームティーチング。  
社会共同体的な生活教育環境の創造。  
総合的人間探求のための研修会・講演会を多数開催。  
親たちが主体的に教育参加。母親教育の充実。講座・個人相談による指導。  
短期・長期研修生の受け入れ。
- 90年 人間環境学会を創設。理事長就任。
- 92年 論文『人が育つ町』を発行。
- 99年 写真集『いいものみつけた』出版。
- 2001年 『創造の森の仲間たち -札幌トモエ幼稚園のファミリー教育-』（樹心社）出版。
- 03年 『お母さんが輝く子育てのすすめ -人間の素晴らしさを発見する教育-』（樹心社）出版。
- 06年 文部科学省・人権教育研究指定校に。